

教育と医学

平成5年1月号 (第41巻第1号)

特集 今、親たることを問い直す

第39回教育と医学の集い
 「養育」親たることと条件……………前田重治 2
 「シンポジウム」今、親たることを問い直す「発言要旨」……………4
 親としての原点に立つて(中村亨・家庭の教育機能を考
 える(渡野穂子・学級の子どもの通して、家庭と親につい
 て考える(伊東幸純・子どもの心と親の心(小林隆児)
 「養育要旨」今日の家庭と親……………朴俊照 30
 働く母親の子育て―日米比較……………中田照子 40
 男だからこその子育て……………上寺久雄 50
 文化としての子育て……………射場智子 57
 親のできることでないこと……………多賀幹子 63
 対話を越える親子の心の触れ合い……………中井喜美子 71
 親が自立するとき……………島本恭介 78
 「ニッセイ」出合いの教育……………岡田智美 84
 子どものレポートから……………87
 ひかり園について……………牛島義友 89
 特殊教育のページ(文部省特殊教育課・国立特殊教育総合研究所)……………97
 カレント・トピックス……………96 教育と医学関係文献ノット……………103
 編集後記……………104



子どもの心と親の心

(児童精神科医の立場から)

一、はじめに

児童精神科医として日常多くの子どもたちと接してい
 る私は最近の臨床経験を通して「親自身の心の在り方や
 成長」について、子どもの心の病が親自身の問題とどの
 ような関連があるのか、また治療を通して子どもと親が
 どのような変化を遂げて成長していくか、心の病が治つ
 ていく際にどのような要因が大切であるかをお話して
 みたいと思います。
 ところで児童精神科臨床の最近の傾向として、患者の
 年齢が次第に低くなってきていることが伺われます。大
 人のノイローゼにしか見られなかつたような症状が幼児
 や児童にみられたり、大人のうつ病が子どもにもみら

れるようになってきました。最近是比较的気鬱に児童精
 神科の外来に相談に訪れる例が増えてきていますので、
 こうした事実がすぐに子どもへの心の深刻さを示して
 いると即断することは危険かもしれません。
 また、最近では外来に両親そろって相談に訪れる例が
 なり増加しているという印象を強く持つようになりまし
 だ。子どもの精神保健への関心が高まってきたことや、
 育児に対する両親の役割の変化など、その背景に考えら
 れるかもしれません。ともあれこうした傾向は子ども
 の治療を行う際に家族ぐるみでの治療を可能にし、治療が
 比較的スムーズにいく場合が多いように思います。
 では早速、最近経験した具体例をいくつかお話しして
 みたいと思います。

小林 隆児
 (文部省教育審議会)



二、臨床例からみた母子の

心のつながりの諸相

第一例 A君

初診時三歳一か月の男児。主訴は言葉の遅れと、親になつかず無関心で、最近他児に非常な乱暴をたららく、いこうとした。一歳の弟にもひどく乱暴をたらさ、弟を突き倒す、鉄を持って追いつく、弟のペニスを鉄で切ろうとするといった深刻なものでした。母親はこの子にははじめて怒りも反応せず、指示が通らないといつて嘆いていました。育児に自信がなく、二歳終わりに保育園に入れることになったのです。しかし、保育所でも非常に乱暴で、他児がみんな遊んでいるところに「ロック」を投げつけたり、他児の手をかんだりして大問題になっていました。

発育歴を聞きますと、乳児期から養育に骨の折れる子どもで、夜なかなか寝ず、食事も不規則で、いくらだめでも効果なく、何をしても喜ぶことがなかったそうです。母親は育児にすいぶん神経を使い、ミルクの量や子どもの体重を頻りに計っていました。用事のためには他家に預けても母親を求めて泣くこともなく、迎えるに「行って少しもうれしそうな表情を浮かべなかつた」とい

を使っていた」と、幼児期の姿が語られ始めました。こうして数回の面接のなかで母の生い立ちの輪郭が浮き上がってきました。

それは次のような内容でした。家庭は経済的にも厳しく、アルコール中毒の父のもと、六人同胞の上五人の兄に囲まれた末っ子でただ一人の女の子でした。男兄弟だけ大事にされ、自分が手伝いしてもまともな評価してもらえなかつたそうです。そのため、ひかみ根性が強かつたといいます。母も娘に母らしいところをほとんど見せてくれなかつたそうです。こうしてA君の母親は自尊心がもたず、とにかく人に非難されたくない一心で何事もきちんとすることだけに気をつけ、人から馬鹿にされなないように心がけたそうです。「馬鹿にされたくないが、ほめてもらいたくない」という心境だったといいます。自分の欲求を常に抑えつけてきた母にとつては、自分の子どもがなにかを欲しがる姿をみるとつい嫌な感情が生まれてしまつていました。

治療初期の面接中、子どもはぎかに独り言で「あれだめよ」「これだめよ」「うた、うた」「ただだめよ」と、いつも母から言われているせりふを咬っていました。子どもにも片づけさせようとしても、やろうとせず、母親の顔をうかがっているだけで、母はこの子にどう接し

います。

こうした母子交流の問題は、出産時の話を聞いてみると、非常に根が深いことが明らかになってきました。母は出産がとても不安で、陣痛が起る時の心細さは大変だったようで、出産直後も子どもを産んだ喜びは全くなく、とにかく五体満足な身体ではとただけだったそうです。そんな心理状態だったので、周囲の看護婦からはあなただのような母親の心細さはないとまで言われたそうです。このような母親の出産時の心細さは今日まで育児不安としてずっと問題を引きずつてきていることは容易に想像されませんでしたし、面接には父親も同席し協力的でしたので、父母子の三者同席面接で一緒に子どものことを考えていくことにしました。

治療経過 まず私は面接場面で示す母親のひどく緊張の強いひきつった表情が気になりました。話す時にいつも頬がひきつり、ひどく神経をつかっているのが手にとるように分かりました。そこで私は「ひどく緊張しているように見えるので、そのことを取り上げらうしやるようですね」と話して、そのことを取り上げると、母親は「緊張ではなく、相手の質問に自分を含むせよ」といっつも気を使うから」と述べてきました。そこで「それはいつ頃から始まったように思いますが」と尋ねたところ、「幼児期から母の態が厳しく、いっつも母に気が

ていか戸惑つてしまつています。子どもには「いや」とか「もう少し遊びたい」とか、はつきり言つてほしいともいいます。こうした母には子どもがどのような気持ちか分からない苛立たしさを感し取ることができません。

母との面接が次第に深まつていく中で、一か月もすると、朝保育園に行くのを拒否しはじめると母子の分離不安が感じられたり、かんしゃくでもふざけてやつているように感じられ始め、後片づけをしようといくと自分からやるようになつたと母は報告するようになりました。とにかく叱ることをやめて、少しでもほめるように心がけるようになつたそうです。乱暴なことをしていても、叱らずに「やりなさい」と言うようにやめるようになつたともいいます。さらに以前ひどかつた同じ質問の繰り返しも繰り返さなくなりました。母はトライアセツに子どもを語りかけにうなずくようになったらそうなのといえます。こうした質問癖は、母がやさしく応えてくれるときは満足してやめるが、面倒くさそうに相手をするると執拗に続けることが母にも分かつてきました。弟に對しても、眠くなると「ねねするよ」と言つて弟の手を引いて一緒に寝ようとするまでになりました。母に語りかけることが増えてきて、母へつたりになり、ひとり

ではどこにも行こうとなくなりました。急速に母に甘えるようになってきました。こうして母も「この子かわい」という気持ちで見られるようになったと語るようになりました。

第二例 K君

主訴は抜毛。初診時十一歳十一か月、小学校五年の男児。
K君が小学三年の二学期終わりに南国から福岡に転居しています。母の実家が近くで、今も実母が住んでいました。

発達歴 早産、吸引分娩、仮死出産などの周産期障害があり、身体運動面の発達に全般的に少し遅れ、始歩一歳四か月。よくころを子どもで、運動が苦手でした。そして図鑑などの本をよく読み、他児と遊ぶことは少なく干渉されるのを嫌っていました。夜尿が小学校低学年まで続き、爪かみは現在もなお続いていました。幼児期から自己主張を余りせず、母に甘えも示さなかつたといえます。母は子どもの気持ちがかめずイライラさせられることが多かったのですが、内心はそうした一面が自分にとっても似ていると思っていました。しかし、知恵づきは早く、大人顔負けのことを言ったりは大人を感心

もなく引越しよう病になっていたことが分かりました。暖かい土地から冬の福岡に来たことも関係していたようでした。母子ともにカルチャーションクを受けけていたのです。

その後数回の面接で次第に母親自身の心の問題を取り上げていきました。三回目に「お母さんは子どもの訴えを懸命になって説得しているようにみえますね」と私が母に指摘すると、自分も親にいつも気を使っていることで、親の期待に応えようとする気持ちで非常に強かったこと、小学校の時、同性の友達にはほとんど落し込めず、男の子とはかなり遊んでいたことなど、母自身の子ども時代が語られるようになりました。その後、K君の食欲は回復し久し振りに学校給食をとり、抜毛は著しく減少し、表情も今までにない明るさが戻り、K君は診察室で母に寄りかかりふざけては母子の交流を楽しむようになりました。母はK君の攻撃的言動にも反論せず黙って聞き入ることができるようになってきました。こうした母の内面的変化の結果、母はそれまで子どもの傷を平気で見ておられたのに、この頃は傷を見ると痛いだらうなど初めて共感的態度が持てるようになりました。「心が柔らかくなった。溶けてきたと思う」とその変化を表現していました。こうした母子関係の質的変化に

させていきました。小学一、二年はとても楽しかったのですが、三年の頃から抜毛が出現してきました。福岡に移ってからは学校にだじめず次第に抜毛がひどくなっていき、不登校が目立ち始めて受診となったのです。

診察の結果からK君はもともと発達障害の一つである学習障害が基底にあることがわかりました。母子交流を促すために家族療法を開始しました。

家族療法の経過 治療の初期には、K君から母親に思いつき、先日微熱があつたにもかかわらず水泳に行かせられたことを思い出して「ラフラフするのには、無理やり行かせて！ 母さんがいない時、泣いているんだぞ。苦しいのに分かつてくれない」と母に泣いて抗議します。母はそんな時に黙って受け止められず、「どうしてほしいの」とK君に盛んに言葉で説明を求めていました。K君の気持ちも分からないうちにかしさが感じられました。さらに話をうながすと、「学校はたまには休ませてください。こちだつて困っていることはあるからね」と母への気兼ねを交えながら自分の要求を大粒の涙を流しながら語ったところ、母も涙ぐむようになりました。ここから私に初めて母の感情を取り上げると、母自身転居後ま

よって、K君は母親への甘えを堪能した後に友達との関係にスムーズに入っていくことができました。

その後の治療の中で母は自分の生い立ちを振り返り、以下のようなことが明らかになってきました。「母自身が自分の母の前でいつもい子になると思っていた。いつも母の期待に応えようとしていた。母からいつも「あんなふうになりなさんな」「こうなさい」と言われ続けました。そのためか自分の中の理想は高く、こんな気持ちで中学の時に急に高まり、周囲の人と会つてもどこかなじみず自分をとても意識するようになった。母に支配されていたということだと思ふ。自分もこの子にそのように接していたと思ふ。自分も若い頃自己主張ができたかった。自分が自己主張すると周囲から受け入れてもらえないことが多く、自分を抑えてきた」といいます。そんな気持ちがかつとふざけ、子どもにも自然に振る舞えるようになっていった。

第三例 T子

主訴は食思不振、肥満恐怖、やせ願望。初診時十二歳、小学校六年の女児。
家族構成 両親と兄の他に父方の祖父がいる五人家族です。祖父はT子の発病少し前に脳卒中で倒れ、以後父

の兄夫婦が一時交代で面倒をみています。父は某大
 学教授。家庭のな人で、母にいつも子どもへの接し方につ
 て事細かに忠告する人です。母も大卒。結婚当初から
 祖父と同居。祖父の世話と子どもの世話を専身の行い、
 家族にはいつも手作りの物を与えるなど、近所では評判
 の母親でした。母は継母の末子で、養兄の長兄(子
 爵)とは親子ほどの年齢の開きがあり、幼馴染母は
 結核で長い病床生活を送り、母が八歳の時には実父も病
 死。そのため長兄が実質的に生活の面倒を長年みていま
 した。
 現病歴 一昨年(小学五年)の夏、腹部にむかす
 る不快感が起こり食欲が低下したことがきっかけで食事
 を抑えるようになりました。やせ願望もその頃から起
 こってきました。その翌年の春、母親との間で食事をす
 るしないで言い争うようになりました。母親が三月初め
 の父兄懇談会で他の父兄から自分の子どものやせを指摘
 されてから、ますます母親の不安は増強し、子に強く
 食事を追るようになりました。子は反発を強め、つい
 に全く拒食となり、三月中旬、最初に受診したことも病
 院のすすめで当科を受診。肥満恐怖の緩和と食事のコン
 トロールを目的に入院をすめたところ、子は強い抵
 抗を示さず、納得の上で即日入院。まもなく家族療法を

親に対する接近欲を余り示さなくなりました。しかし、
 退院に余り気がすまない子を見て母親の分離不安が
 再び強まってきました。『小さい頃は洋服をもらって
 も大切にしまっただけだったのですが、おしゃれを楽し
 み始め、一か月半で退院。その後、夜の不安も和らぎ深
 夜放送を楽しむようになりました。自分から希望してつ
 けてもらった女子大学生の家庭教師に習って勉強に励む
 ようになりました。その中で次第に中学生生活への不安が
 軽減していききました。兄とも対等な口のきき方をし始め、
 父親にも『早く寝たら』と批判的な言動が目立つようにな
 りました。子はこうして自立へと向かい始め、その
 後は両親のみで家族療法を行いました。その中で母親
 自身の口から、自分は親子の年齢が離れ過ぎていて母親
 の愛情を知らないで育ったこと、兄弟の年齢も離れ過ぎ
 て兄弟らしいもまれ方をしていたこと、初潮が高校一
 年と遅れていたため、中学時代女の子同士の話にも入
 っていけず寂しい思いをしたこと、結婚後も第一子を流産
 し、子宮發育不全と言われていたことなど女性性をめぐ
 る未解決の葛藤が次々に語られました。こうした母
 親の葛藤が家族療法の中で両親の間で共有化されて夫婦
 連合が形成されてからは、母親はそれまでのおおとし
 た感じが無くなり、今回の子との発病と家族療法のプロ程

開始しました。なお入院時の身長は一五〇cm、健康時四
 ○kgあった体重はこの時二九kgに減少していました。初
 潮は未だでしたが、乳房の膨らみなどの第二次性徴の兆
 しは認められました。
 家族療法の間 子が入院して特徴的であったのは、
 子が母親に対して『おしゃわしい。一人にさせて』
 と拒絶的態度を示すためか、母親の分離不安が強くなり、
 家庭内の混乱がさらに増強したかの感があったこととし
 た。しかし、一日もすると、外泊して母親と一緒に入
 浴したがるなどの接近欲が強まることもに過食がみられ
 るようになってきました。ただ、両親の子に対する態
 度には、兄がわざとらしいと批判するほどに、不自然な
 優しさがありました。子は『急に優しくなるので気持ち
 悪い』と、いつか批判しています。しかし、入院後四週
 足らずで、体重の回復と食事のコントロールの回復に
 よって医学的危機と家庭内混乱からの脱出がみられた
 め退院となりました。
 食事の問題が薄らぐ一方で四月からの中学入学が困難
 となり不登校を呈し始め、友達の中に入れないことが現
 実の問題となってきました。自宅では二階の自室に独り
 で寝ようとしていますが、夜になると不安が高まり、独り大
 声で泣き叫ぶという状態がしばらく続きました。しかし、

昼間は今までになく生き生きとし、おしゃれに関心を示
 し始めます。『今まで休むことを知らなかった』と言
 学校を休む生活を楽しんでいる様子でした。家庭内では
 子との父親への接近欲が高まり、一緒に寝たり、父親の
 仕事帰りをまるで『恋人を迎えに行くみたい』と母が表
 現するほどに待ち望むようになりました。母親と子との
 関係は緊張が高まる一方でついに母親は抑うつ状態に陥
 り薬物療法を受けることになりました。子は寝ている
 母親のおなかの上に押し入れの上段から飛び降りたり、
 『鬼婆』とのしるまでの攻撃性を示すようになってい
 きました。
 登校に対する不安が高まり六月中旬、自己破壊的行動
 が出現し緊急入院。四日後に退院。その後、再び自殺
 企図で緊急入院。しかし、今回の入院で初めて十代の若
 い女性と同室になり、『まるで寮生活みたい、死ぬほど
 楽しい』ことを入院初日の夜に笑いこげながら報告。
 女の子同士で病棟スタッフのうわさ話を楽しんだり、勉
 強の方法を教えることなどで中学生活に對す
 る不安が次第に緩和していききました。病棟生活の中で自
 分の世界を創造し始め『学校も嫌、家も嫌』な状態とな
 りました。理想の人は兄さんみたいな人とい、兄の真
 似を盛んにするようになっていきました。この頃には父

